

に似て、大きいものでは数升もある。現地の人びとが採集して飼育しているこの大蟻を、農園は巢ごと買いとり、木のでっぺんにすえつける。強度のある籐や竹を樹木間にかけてわたし、蟻が自由に往来できるようにしておく、どの果樹も害虫に食い荒らされない。柑橘、檸檬などの木にもつとも有効である。

(清代・屈大均『広東新語』)

清代になると、樹間にトウやタケなどを使って空中回廊をめぐらし、ツムギアリがすべての木にまんべんなくいきわたるようにしたという。このやり方は民国のころまでつづいた。

芸をするアリ

帝王の珍味になったり夢のなかで結婚したり農業の手助けをしたり、アリと中国人の親密な関係はさまざまな形で見られるが、究極はアリの芸ではないだろうか。中国には、アリの世界に人間社会を投影した『南柯太守伝』や『南柯記』のようなフィクションだけでなく、アリを仕込んで実際に人間顔負けのドラマを演じさせる芸があった。

そのような芸がいつごろ成立したのかはつきりしないが、『東京夢華録』『夢梁録』『武林旧事』『都城紀勝』『西湖老人繁勝録』といった宋代のおもだった雑記には、縁日などに「弄虫蟻」(「教虫蟻」ともいう)が出ていたことがしるされている。「虫蟻」というのは、小は昆虫から大はトラや

クマまでの、生きもの全般をいう。「弄」は生きものを飼いならしたり調教したりすること、あるいはそれをやる人のことだ。日本語に訳すなら、動物つかいといったところか。宋の都では、ガマガルの寺子屋、七匹のカメが大きいものから順にかさなるカメの塔、クマのとんぼ返りなど、生きものをつかった芸「弄虫蟻」がさかんだった。

このように「弄虫蟻」といつてもかならずしも昆虫やアリの芸にかぎったわけではないが、『東京夢華録』は、正月十五日の元宵節にはさまざまな見世物にまじり、「追呼螻蟻」もあつたとわざわざしるしている。「螻蟻」は文字どおりに読めばケラとアリ、またそのように小つぽけな虫けらというほどの意味だが、アリそのものをさす場合もままあり、「追呼螻蟻」はまさにアリの芸だったと思われる。字句から想像するに、なんらかの方法で「進め」「止まれ」「もどれ」などの号令をかけてしたがわせたものか。詳細はわからないものの、アリの芸は、すでに北宋時代にはあつたのではないかと推測できる。

芸の全貌がはつきりするのには明代になつてからだ。文人の田汝成でんじよせいが実見したところを次のように記録しており、アリ芸が高度に洗練されたものだったことがわかる。

わたしは先ごろ、杭州で鳥獸の曲芸を見た。そのなかに「蟻の戦い」という演目があつた。

どのようなものかという、よく訓練された黄色い蟻と黒い蟻、ふたつの隊がある。どちらの

隊にも首領となる大蟻がいて、目印の旗をさしている。芸人が太鼓をひとつ打つと両軍は対峙し、次の太鼓で入り乱れて戦闘をはじめ。三つめの太鼓が鳴ると双方はさつと別れ、四つめの太鼓でしずしずとそれぞれの穴に退却していった。

〔西湖遊覧志余〕

アリが本気ではなく演技で戦うなどにわかには信じがたい話だが、田汝成以後も何人もの文人が驚きをもってアリ芸について書きのこしている。清代の文学者袁枚えんばい（二七二六〜一七九七年）は、子どものある郷里の杭州で「蟻の陣立て」という演目を見物している。アリつかいは商店をまわっては帳場などで芸を見せ、投げ銭をあつめていた乞食であった。彼の腰には二本の筒がぶら下がっており、それぞれのなかには赤と白のアリ千匹あまりが入っていた。

その筒を傾けると、赤い蟻と白い蟻が台のうえにわらわらとはい出してきた。乞食が一尺ほどの紅旗を振りながら「整列」というと赤蟻が列をつくり、白旗を振りながら「整列」というと白蟻が一列に並んだ。紅白二本の旗を交互に振りながら「敵陣を突っ切つて進め」とどなる時、赤蟻の隊列と白蟻の隊列はただちに交差しながら進んだが、右まわりになつても左まわりになつても列がくずれることがなかった。数周したのちに筒の口を近づけてやると、蟻はまたもぞもぞとそれぞれの筒にもどつていった。

〔子不語〕